

骨の音

木天蓼いるく

あらずじ

事故で両足を骨折した託実は、95歳のおじいちゃんと自宅で療養生活を送っていた。現実逃避で音楽を聴き漁る託実だったが、ある夜お爺ちゃんとイヤホンを分け音楽に浸ると、イヤホン越しに『戦時中の音』が脳内に雪崩れ込んでくる。それは骨の振動を伝って響いてくる、お爺ちゃんの悲痛の記憶だった。

登場人物

託実（たくみ）…事故で両足を怪我した女子高生。うだつの上がらない日々を送っており、音楽で気を紛らわせている。

おじいちゃん…1930年生まれの95歳。認知症が進み、託実のことを奥さんである『千夜さん』だと誤認している。

千夜さん…おじいちゃんの奥さん。数年前車椅子生活のうちに亡くなる。おじいちゃんの愛する人。

ママ…託実が傍若無人に振る舞う様をよく思っていない。おじいちゃんの介護もあり、気が滅入っている。

晴美さん…おじいちゃんの旧友。名前が女性っぽい男性。戦時中、焼夷弾により命を落とした。

作中の音楽については仮に使用しています。

託実の部屋でアラームが鳴る。託実にはベッドから起き、車椅子に腰掛ける（松葉杖でも歩けるが、あえて車椅子）。

1 スマホアラーム「『一日一歩、三日で三歩』」

2 スマホアラーム「『三歩進んで二歩下がる』」

3 託実 「おじいちゃん、散歩の時間だよ」

おじいちゃんは縁側から無言で立ち上がり、託実の背後に立つ。

4 託実 「おじいちゃん、今日は歩くよ」

5 おじいちゃん「おあ…」

6 託実 「今朝ちようどクーポンが入ってね、コーヒーが一杯タダで貰えるの」

7 託実 「だから日頃の感謝を込めて、おじいちゃんに一杯奢ったげる！」

8 おじいちゃん「千夜…ミルク…うあ」

9 託実 「でわ、出発進行ー！」

10 スマホ 「『一日一歩』」

玄関に鍵を閉め、託実とおじいちゃんは散歩道に出る。
（おじいちゃんが託実の車椅子を押す形…）

周囲の風景を眺めながら、託実には回想する。

11 託実 「『2ヶ月前、私は交通事故で両足を骨折した』」

夜道をスマホを見て歩く託実の回想。

曲がり角でちょうどヘッドライトに横顔を照らされるが、音楽に夢中で避けるのが間に合わず、車体に突き飛ばされるー

12 託実 「『気が付かなかった私の自業自得だけど』」

13 託実 「『事故にあったことよりも、病院でママにこつ酷く叱られたことの方が、私には大変堪えたワケで…』」

病室で怒り狂う母の表情ー

14 託美 「『そんなこんなで私は今、自宅で療養生活という名の《介護生活》を送っているワケで』」

コンビニに着く。

おじいちゃんに車椅子を押させている女子高生に、ドン引きする店員。

15 店員 「イラッシャーセー…」

16 託実 「フン」

女王様気分でふんぞり返る託実。

3

コンビニ帰り、公園のベンチにて

公園で遊ぶ子供たちを眺めながら、ミルクバー（アイス）を頬張る託実。

17 託実 「おじいちゃん、コーヒーおいしい？」

18 おじいちゃん「ミルク…千夜ミルク…」

呆れ果てる託実。

19 託実 「『おじいちゃんは5年前、最愛の奥さんを亡くした』」

20 託実 「『千夜さんというのは、おじいちゃんの奥さんの名前で』」

車椅子に乗る千夜さんと、それを押して歩くおじいちゃんのイメージ。

21 託実 「『生前、千夜さんは足を悪くして車椅子生活をして
いたから』」

22 託実 「『その名残でおじいちゃんは、私のことを《千夜さん》
と勘違いしているらしく』」

溶けそうな棒アイスを掻つ込む。

23 託実 「『時々、人間の脳ってのはなんて神秘的なんだろう、
なんて思ったりもする。』」

そろそろ移動しようと車輪に手を掛ける託実。

24 託実 「おじいちゃん、オツム…… オムツ大丈夫？」

25 おじいちゃん「千夜や…桜がきれいだねえ…」

桜並木に惚れ惚れとしているおじいちゃん。
その瞳はどこか遠くの景色を見ているようで。

するとふいに、小さなボールが二人の足元に転がってくる。
同時に短い髪の女の子も駆け寄ってきてー

26 女の子 「…」

車椅子のJKと呆けジジイにどう話しかけたらいいかわかなそうな顔。

27 女の子 「…」

28 託実 「はは…ごめんね、お姉ちゃん足がこんなんだからー」

29 おじいちゃん「晴美さん？」

不意におじいちゃんが口ずさむ。

30 託実 「はるみ…？」

31 おじいちゃん「晴美さん、今はあまり外で遊ばない方がいい…」

32 女の子 「？」

女の子はよくわからないという顔をして、ボールを抱え集団に戻っ
ていった。

それからおじいちゃんは神妙な顔で、降り注ぐ桜の花びらをただただ眺めている。

4

自宅、ベッドにて

33 ママ 「託実っつ アンタまたなにか、おじいちゃんに変なことをさせてないでしょうね」

帰宅するなり怒号を響かせるママ。

託実はいやホンをし、音楽でその怒号を掻き消す。

34 ママ 「おじいちゃんだけで手一杯だったのに……っ、アンタがまた変なことやらかしたら、私、もう頭がどうにか……っっ」

介護疲れと託実の奇行で、頭を抱えるママ。

ふと思い出し、部屋を出て行くとするママに託実が声を掛ける。

35 託実 「そついえばお母さん…… 《晴美さん》って人のこと知ってる？おじいちゃんの知り合いみたいなんだけど……」

36 ママ 「私を知るわけないでしょッッ」

地団太を踏みながら部屋を出ていくママ。
戻ってきて……

37 ママ 「そんなことより、自分の部屋くらいもう、自分で掃除したらどうなのッッ」

鬼の表情のママが、託実のベッドに《トング》を投げ入れる。

38 託実 「……」

よくよく見ると、床にはアイスやらお菓子の殻やらが、ばらばらに散らかつていて漫画本も落ちてる。

39 ママ 「明日までにちゃんとカタしといてよねッッーついでに外ほつつき歩いてる暇があるなら、おじいちゃんの部屋も拭けるとこ拭いときなさいッッ！！！！」

雑巾やらゴミ袋やらをベッドに投げ込まれ、洩々部屋のゴミ拾いにいそしむ託実。

ようやく嵐が去ると、託実音楽を聴きながらたわいもない妄想に
フケる。

40 託実 「『晴美さん…か、おじいちゃん、やるじゃん』」

ニヤニヤしながら《晴美さん》との関係を妄想する託実なのだった
(可愛い女の子だと思っている)。

5

翌日、おじいちゃんの部屋

昼頃に目を覚ますと、二人でご飯を食べてからおじいちゃんの部屋
に顔を出す(おじいちゃんは縁側で食後の日向ぼっこをしている)。
託実松葉杖をつき、おじいちゃんの部屋を散策。

器用に押入れを開けると、おじいちゃんのオタカラを幾つか発見。
その中からフォトアルバムを拝借し、ペラペラめくる。すると、当
時の小学校の集合写真が出てくる。

41 託実 「晴美さん…晴美さん…」

それらしいアルバムを脇に抱え、おじいちゃんの元へ。

42 託実 「おじいちゃん、この中に《晴美さん》って子、いる？」

椅子に腰掛け、反応を待つ託実。

43 おじいちゃん「…」

女子生徒の顔に指を這わせるが、どれもイマイチ反応が無い。

44 託実 「『もしかして先生の名前とか…？』」

怪訝な表情をしページをめくる託実。

すると、おじいちゃんが肩をピクリと震わせる。

45 おじいちゃん「あ、あ…」

46 託実 「晴美さんいた」

年頃の女の子らしく、食い気味でおじいちゃんの指先に飛び付く。

47 おじいちゃん「ハ、ハ、」

48 託実 「あ…」

その《女の子》は頭を丸刈りにして、神妙な顔つきをしている。

49 託実 「…この子、もしかして男の子？」

マジマジと見ると、その《少年》はとても端正な顔立ちで、女の子と見紛うほどに綺麗でまつ毛が長い。

50 おじいちゃん「ぶえつくしよい!!」

51 託実 「あー!! ゴメンゴメン!! 埃かぶってたから…」

ハウスダストでくしゃみをするおじいちゃん。

近場のティッシュで鼻水を拭ってあげる。

52 おじいちゃん「ハル…うう…」

53 託実 「どつしたの、おじいちゃん」

突然涙をポロポロ流すおじいちゃんに、焦って同じティッシュを使って顔を拭ってしまう。ベトベト…

54 託実 「ゴメンね!! 昔のこと思い出すのって辛いよね!!」

近場の布で顔を拭いてあげる。……それはママから手渡された雑巾……。

55 託実 「……」

託実 は開けてはいけない扉を開けてしまった気がして、今日は掃除を諦めおじいちゃんをベッドに寝かせることにした。

6

夜・託実の部屋

イヤホンを耳に差し、ベッドで寝転がる託実。

今日もまた母に散々悪態をつかれた。

冷蔵庫のメモには洗濯物干しといてとか、学校の課題がどつだとか、殴り書きにされていたのを完全に見落としていたのだ。

56 ママ

「『アンタねえ、そうやっていつまでも病人のフリして甘えられると思ったら大間違いだからねッ
『」

実際託実の足は、順調に回復していた。

それでも学校に松葉杖で通うのも億劫で、新学期の授業にも遅れをとっていた為、ダラダラと現実を引き延ばしにしているのだった。その自覚はある。

シャカシャカ

57 託実 「『私ってダメだなあ……』」

音楽で掻き消そうとしても、頭の中にこびりつく母の声はずっと鳴り止まないでいる。

58 託実 「こんなことならいつそ、」

59 託実 「あの時――」

轢かれそうになる自分の回想。

託実の中に暗い感情が渦巻く。

60 託実 「『最低だ……』」

不意に口について出そうになった言葉を、すんでのところで飲み込む託実。

61 託実 「『ワタシ………、なんのために生きてるんだろう………』」

布団に潜り込み、嗚咽を漏らす託実。

音楽をかき鳴らしながら、眠りにつく――

7

深夜、月の出ている空

物音で目を覚ます。

音楽はいつのまにか止まっていて、イヤホンも放り出されている。

62 託実 「おじいちゃん……？」

深夜になるとよくおじいちゃんが家中を徘徊するため、託実の様子を見ようと起き上がる。

おじいちゃんはいつもの縁側の椅子に座り、月を眺めている。

63 託実 「おじいちゃん、寒くない？」

膝にタオルケットをかけてあげるが、表情は変わらないまま。

64 託実 「ちょっと待ってて」

一度自室に戻り、上着を羽織って戻ってくる。

65 託実 「昼間ね、おじいちゃんが元気になる曲探してたの」
隣の椅子に座り、ポッケからスマホとイヤホンを取り出す。
音楽アプリから昔の歌謡曲のプレイリストを選び、自分の片耳に挿す。

66 託実 「私ね、辛い時とか悲しくなった時、音楽で気持ちを落
ち着かせるんだ」

67 託実 「おじいちゃんも辛いこといっぱいあったかも知れない
けど、大丈夫だよ」

母親の表情が霞む――

68 託実 「絶対、大丈夫だから……」

いつの間にか自分に言い聞かせるようにして呟いている託実。
イヤホンのもう一方を摘まむと、おじいちゃんの片耳に挿してあげる。

69 スマホ 「『さあさウギウギ 太鼓たたいて』」

70 スマホ 「『♪派手に踊ろよ 歌およ』」

71 おじいちゃん「……」

パジャマ姿の託実とおじいちゃんが音楽に浸りながら横並びに月を
眺める。

72 託実 「なんだか踊り出したくなる曲だね……今はこう、上半
身だけしか踊れないけど」

リズムに身を委ねる託実。
横を向くと、おじいちゃんが微かに震えている。

73 託実 「……おじいちゃん？ やっぱ寒い……？」

おじいちゃんの両肩に手を置く託実。

74 イヤホン 「『――ggg』」

8

75

託実 「え…？」

76

イヤホン 「『グオおおおおオオオオ』」

1945

真夏の夜の町が、真つ赤に燃え上がっている。

家々から避難する町の人々。

周囲で炎に包まれる人間の間を縫って、駆ける少年。

77

おじいちゃん（15）「母さん……！！お姉ちゃん……っ！！」

どこもかしこくも火が燃え移り、どこへ向かえばいいか見当がつかない。
すると数十メートル先で、級友を見つける少年。

78

おじいちゃん（15）「ハルミ―」

その直後、空から光が降り注ぎ

光に呑み込まれながら一瞬、彼がこちらを振り返った気がした―

9

骨の音

79

託実 「晴美さんツツツツ！！！！」

咄嗟に《彼》に手を伸ばす託実。

しかし目の前には月明かりに照らされた庭と、その間を仕切る掃き
出し窓があるのみ。

託実は全身に汗をかきながら、喉の奥が焼けるような感覚に襲わ
れている。

80

託実 「『べっ…』」

顔中が熱い。まるで焚き火に手の平を近づけ過ぎた時のように、全身がヒリヒリしている。

81 託実 「あれ…？」

違和感に気づく。託実は今片手で窓に手を付いていて、《両足で全身を支えている》。

82 託実 「おじいちゃん」

振り返ると、イヤホンがすっぽ抜けた先に、俯いてピクリとも動かなくなったおじいちゃんがいる。

83 託実 「おじいちゃんっっ！！」

10

後日譚

84 アラーム 「『一日一歩、三日で散歩』」

託実アラームで目を覚まし、制服に着替え縁側で伸びをしている。あの後おじいちゃんは病院に緊急搬送され、そのまま病院のベッドで息を引き取った。

葬儀もつつがなく執り行われ、お骨は千代さんと一緒のお墓に埋葬されたらしい。

母は抜け殻のように日々を過ごしている。

85 託実 「…」

託実病院で医者が妙なことを口にしていたのを思い出す。

「ー医者曰く、《おじい様の両足にはヒビが入っており、前日になにか激しい運動などはなされましたか？》とのこと。

託実はおじいちゃんとの散歩道を回想するーしかし、部屋を自由に動き回っていたおじいちゃんに、そんな兆候は見られなかった。

数ヶ月お世話になった車椅子と松葉杖は、もう必要ない。
託実 は学校の支度をしつつ、図書館から借りていた《歴史の教材》
も鞆に仕舞って、家を出た。

86 託実 「おじいちゃん、今日も歩くよ」

晴れ渡る空を見上げて、迷いのない一歩を踏み出す託実。

了